第 1 章
英語は空間が大好き！
English Loves Space!

英語は何でも空間に結びつけたがる

英語は**空間**が大好きな言語です。物の単純な動きや存在を空間の中でとらえて表現したがります。どんな言語にも独自の特徴がありますが，英語はまったく単純な動きや存在を空間と結びついた表現に変えることが好きであるというのがその特徴なのです。

たとえば，「目を覚ます」や「起き上がる」行為は，それぞれ ‘awake’ や ‘arise’ という 1 つの動詞を用いても十分に足りますが，同じ意味を表すのに ‘wake up’ や ‘get up’ というほうを好みます。いいかえれば，「朝目を覚まして起き上がること」は現在の英語では，それらの行為が何らかの形で「上に（up）」動く行為と関わりがあるかのように話されるのが普通なのです。

今でも覚えているのですが，私が子供の頃は，‘I sat down.’ や ‘I stood up.’ というと祖母にしかられたものです。当時の祖母にとって，座ったり，立ったりは ‘I sat.’ や ‘I stood.’ が正しい表現だったのです。

「空間」をキーワードにして英語を眺めると，次のような英米の違いも理解することができるでしょう。

電車に乗り降りする場合，イギリス人は ‘get into / get out of a train’ というのに，なぜ，アメリカ人は ‘get onto / get off a train’ というのでしょうか。これは，列車を，イギリス人は中に

入ったり，そこから出たりする「**入れ物**」として見るのに対して，アメリカ人は上に乗ったり離れたりする「**面**」として見るからなのです。

イギリスでは列車のドアが日本と同じようにホームと同じ高さにあるのに対し，アメリカでは列車がホームより高い位置に停まるため，乗るのに踏み段を上るからかもしれません。

私も実際，アメリカにいるときには，‘get onto a train’ というほうが自然に感じます。これが列車に乗る場合に体を動かすときの動作だからです。イギリスにいるときには，‘get into a train’ というのが自然です。なぜなら私はこのように体を動かすからです。

しかし車に乗る場合は，‘get <u>into</u> a car’ の代わりに ‘get <u>onto</u> a car’ というネイティブスピーカーはいません。なぜなら車の中に入ることは疑いなく「入れ物に入る動き」だからです。‘get onto a car’ はイギリスでもアメリカでも「面の上に乗る動き」，つまり「車の屋根の上に座る」ことを意味します。

グァム島は小さな岩？

別の例をあげましょう。アメリカ人は，通りを「面」ととらえて ‘on the street’ といいますが，イギリス人は「入れ物」ととらえて ‘in the street’ といいます。

私にはアメリカのグァム出身の友人がいて，彼女は ‘When I was on Guam ...’（私がグァムにいたころは...）といういい方をします。これは私には，まるで彼女が大洋の真っ只中のかなり小さな岩の上にちょこんと座っているかのように聞こえます。

みなさんは，自分の住む日本をどのように感じているでしょうか。自分が，日本という航空母艦の甲板のような「面」に「乗っている」とは決して考えないでしょう。

同じ理由で，私にとってグァムのような島は，日本同様，そこに住む人が周囲を囲まれていると感じるのに十分な大きさがある「入れ物」なのです。ですから私には，‘in Japan’ と同じように ‘in Guam’ というほうが自然に感じられるのです。

本書ではまず，一種のウォーミングアップとして，基本的な前置詞や副詞が互いにどのように関連しているのか，またどのような種類の意味をもっているのかを見てみたいと思います。そして後半で，いくつかの前置詞と副詞を，特に動詞とともに使われる場合について，詳細に取り扱うことにします。

「空間」から「時間」へ

「空間」から「時間」へ ── 前置詞の意味の広がり

前置詞は「空間」から「時間」へと広がりを見せます。前置詞の意味の広がりを表した左の図を見てください。

この図で，たとえば，「空間」と「時間」が「動き」，「経過・通過 / 期間」，「位置･時点」，「源･起点」，そして「目標」という，より小さな箱でつながっているのがわかるでしょう。（‘/’ は「または」を表します）

また，「空間」と「時間」の両方に同じ前置詞を用いている場合があることもわかります：

over the fence「塀（へい）を越えて」	＝ 空間―経過・通過／期間
over the weekend「週末に」	＝ 時間―経過・通過／期間
at the station「駅に」	＝ 空間―位置
at nine o’clock「9 時に」	＝ 時間―位置
from the station「駅から」	＝ 空間―源・起点
from the weekend「週末から」	＝ 時間―源・起点
to the mountains「山へ」	＝ 空間―目標
to Thursday「木曜日まで」	＝ 時間―目標

私が冒頭で「英語は空間が大好きな言語」と述べたように，このリストを見れば，多くの前置詞がまず「空間」と，次に「時間」と結びつきがあることがわかります。

おそらく英語は「空間」と「時間」が大好きである，いいかえれば「広がり」が大好きであるともいえるでしょう。しかし主として重点が置かれるのは「空間」です。

こうした小さな箱について，すべてを１ページで説明することは不可能です。そこでそれらを先ほどの図から抜き出して，個々に次の表で示しました：

空　間	時　間
動　き	
down the hill「丘を下って」	
up the hill「丘を上って」	
into the river「川の中へ」	
onto the bed「ベッドの上へ」	
about the house「家中を」	
around the house「家中を」	
経過・通過 / 期間	
for two miles「2 マイルの間」	**for** two days「2 日間に」
over the river「川を越えて」	**over** the weekend「週末に［週末中］」
across the road「道路の向こう側に」	
through the door「ドア越しに」	**through** the night「夜通し」
through the tunnel「トンネルを通って」	**through** the 1990s「1990 年代を通して」
past that house「あの家の前を通って」	**past** the weekend「週末を過ぎて」
位置・時点	
about the house「家中に」	**about** six o’clock「6 時ごろ」
around the house「家中に」	**around** six o’clock「6 時ごろ」
at the station「駅に」	**at** nine o’clock「9 時に」
on the platform「駅のホームに」	**on** Saturday「土曜日に」
in the house「家の中に」	**in** 1976「1976 年に」
before the station「駅の前で」	**before** Monday「月曜日の前に」
between two houses「2 軒の間に」	**between** Friday and Tuesday「金曜と火曜日の間に」
by the tree「木のそばに」	**by** Wednesday「水曜日までに」
beyond the mountains「山の向こうに」	**beyond** the weekend「週末を過ぎて」
above the table「テーブルの上方に」	
off the table「テーブルを離れて」	
under the table「テーブルの下に」	
over the mountains「山の上に」	
against the wall「壁にもたれて」	
among the trees「木立の中に」	
beside the lake「湖のそばで」	
beneath the stairs「階段の真下で」	
below the mountain「山の下のほうに」	
源・起点	
from the station「駅から」	**from** Thursday「木曜日から」
out of the room「部屋の中から」	
目　標	
for the summit「頂上をめざして」	
to the station「駅に」	
towards the mountain「山に向かって」	**towards** the weekend「週末あたりに」

この表を作成しているとき，私はまた「程度」の概念も同じレベルで図表に当てはめようと考えました。たとえば，次のような用法です。

程　度：
to the maximum「最大で」
at 32 degrees「32 度で」
for 5000 yen「5000 円で」
about 1000 yen「約 1000 円」
below average「平均以下で［の］」
above average「平均より上で［の］」
under 20 years「20 歳未満」
over 100 years old「100 歳以上」
between 1000 and 1500 yen「1000 円から 1500 円の間」
past middle-age「中年を過ぎて」
etc.

しかし私は，これらを表に入れることはしませんでした。なぜなら，こうした「程度」の用法は，「空間」や「時間」の一部として考えても不自然ではないと感じたからです。‘about ten o’clock’ と ‘about 1000 yen’ を結びつけて考えることはそれほど難しくないでしょう。

同じような理由で，「手段」「目的」などの分類もあえてしませんでした。しかし完璧を期すために，次にそれらの例をいくつか紹介しておきます。

手　段：
go **by** car「車で行く」
write **with** a pen「ペンで書く」
unscrew it **without** a screwdriver
「ネジ回しなしでネジをはずす」

目　的：
work **for** money「金のために働く」
方法・様態：
do it **with** care「注意してそれを行う」
受け取り手：
a present **for** his wife「彼の妻へのプレゼント」
同　行：
go **with** a friend「友人と一緒に行く」
go **without** her husband「夫を同伴せずに行く」
関わり：
a TV programme **on** animals「動物に関するテレビ番組」
a poem **about** love「愛についての詩」
反　応：
jump **at** a noise「物音に（驚いて）跳びあがる」
be surprised **by** her behaviour「彼女の行動に驚く」
支持／反対・対立：
be **for** an idea「ある考えに賛成である」
be **against** a plan「ある計画に反対である」

こうした意味は「空間」や「時間」の意味ほど重要ではなく，わざわざ項目を立てて扱う価値はないと思われます。しかも，これらも何らかの形で「時間」あるいは「空間」の意味とつながっているのです。

たとえば，‘I am **against** the plan.’（私はその計画に反対だ）と ‘The ladder is **against** the wall.’（そのハシゴは壁に立てかけられている）の文中の ‘against’ は実際には同じような意味であり，どちらも「反対・対立」を表しているといえます。

‘The ladder is against the wall.’ では空間における「反対・対立」であり，‘I am against the plan.’ では心理的な「反対・対立」なのです。もう 1 つ例をあげましょう：

They headed **for** the mountains.「彼らは山に向かった」
I work **for** money.「私はお金のために働く」

最初の例は「空間」の下の「目標」の項目にあげられています。第二の例はその後にあげた，その他のグループの中の「目的」にあげられています。しかしどちらの場合も「何かに向かう／何かを標的にする」という共通の意味をもっているのです。

最初の例は目に見える具体的な動きですが，2 番目の例は目に見えない心理的なもの（比喩的な意味）です。

英語は空間中心の言語，日本語は動詞中心の言語

日本語を勉強している外国人はよく次のような質問をします：

「『外に待つ』と『外で待つ』のどちらが正しいですか」
「『庭に遊ぶ』ですか，それとも『庭で遊ぶ』ですか」
「『道で歩く』や『道を歩く』といえますか」など。

日本語では,「に, で, を」につながるのは動詞ですが, 英語では, それらの小さな言葉に相当する at, in, around（前置詞）がつながるのは動詞ではなく，むしろ「空間で起こっている出来事そのもの」なのです。次の例を比較してみてください。

ジョンが	家	**に**いる

John	is	**in** the house

日本人のみなさんは，この場合，「動詞 is の次に来るのは ‘in’ なのか，あるいは ‘at’ なのか」などと迷うことはありません。

みなさんにとっての問題は次のようなものです：

「‘the house’ には ‘in’ を使うのですか，‘at’ を使うのですか」

つまり，‘the house’ がどのような種類の空間かということが日本人の英語学習者にとっての最大の問題なのです。

英米人は，家を「立体的なもの」，つまり「入れ物」ととらえ ‘in the house’ といいますし，床は「平面的なもの」，つまり「面」なので，当然のことながら ‘John is on the second floor.’ といいます。この 2 つを区別しているのが，まさに前置詞なのです。

日本語はこの区別を無視して「ジョンが 2 階にいる」といいますが, これではジョンが「入れ物」の中に存在しているのか,「面」の上に存在しているのかという区別がつきません。日本語にとって重要な点は,「存在すること」それ自体なのです。

「に」に結びつくのは「いる」ですが，‘in’ に結びつくのは ‘is’ ではなく ‘house’ なのです。しかし，「いる」と ‘house’ はそれぞれ文中での働き（品詞）が異なりますから，ここに日本の英語学習者は難しさを感じるのです。

日本語では，世の中で起きる多くの出来事を動詞中心的な見方でとらえ，英語では，その同じ出来事を空間を中心にとらえているのです。したがって，日本人の英語学習者は，前置詞，および前置詞と密接な関わりのある「句動詞」に問題があることが予測されるのです。

これはとても重要な考え方なので，別の例をもう 1 つあげることにします。

誰かが水しぶきをあげてプールの中に跳び込む場面を想像してみましょう。英語では ‘pool’ という語があり，日本語でも「プール」という語があります。英語にも日本語にも，‘jump’ と「跳ぶ」

があります。プールはもちろん１つの囲まれた「入れ物」です。したがって，「プールに跳び込む」行為は次のような表現方法をとります：

jump ＋ 囲まれた入れ物 → jump into the pool
跳ぶ ＋ 囲まれた入れ物 → プールに跳び込む

「跳ぶ＋囲まれた入れ物」を日本語では「プールに跳び込む」と表し，英語では ‘jump into the pool’ と表します。それでは，この状況を描写する日本語と英語の表現方法の違いは何なのでしょうか。

まず，日本語で「跳び込む」というときには，必ず「〜に跳び込む」というように，「に」と「跳び込む」は分けることのできないものなのです。

一方，英語では，「ステージに跳んで上がる」場合は ‘jump onto the stage’ というように，‘jump’ とそれに続く前置詞は独立したものです。

ここで，‘into’ が「に」に対応する語ではなく，むしろ「込む」のほうに比重があることに注目してください。

日本語は，囲まれた空間に入ることを「〜込む」と動詞で表し，英語は，それを ‘into’ という前置詞で表すのです。世の中で起こった同じ出来事をまったく違った見方で見ているのです。この例では，囲まれた空間は，日本語では「動詞の中」に存在しており，英語では「前置詞の中」に存在しています。

先ほどの「2 階にいる」は，「存在する」ことについて述べているのですが，日本語では，それが「地点」，「表面」，「地域・区域」など，開いた空間か囲まれた空間かを問わず，どこに存在していようが，「〜にいる」には影響を与えません。

英語では，これらは，空間の関係を示す異なる前置詞によって次のように表されます：

John is **at** the station.「ジョンは駅にいる」（地点）
John is **on** the platform.「ジョンは（駅の）ホームにいる」（表面）
John is **in** the garden.「ジョンは庭にいる」（区域）

もちろん，日本語でも，あえて「中にいる」，「上にいる」などということによって空間を明確にすることが可能ですが，日本語ではいわなくてもわかる場合には，わざわざこのようないい方はしません。一方，英語では，いったん空間の種類と性質が確立されたならば，それを次の例のようにいう必要があるのです：

in the house「家（の中）に」
in the basement「地下室に」
on the second floor「2 階に」
on platform 4「4 番ホームに」
on (the slopes of) the mountain「山（の斜面）に」
at the summit (of the mountain)「（山の）頂上に」
at the station「駅に」
etc.

動詞中心の言語である日本語と，空間中心の言語である英語とのこの違いを把握すれば，英語の本質の多くを把握できるでしょう。